

占領期の「大宅壮一」をめぐる「点と線」

阪 本 博 志

はじめに

東京都世田谷区八幡山の財団法人大宅壮一文庫は、本年五月、創立四十周年を迎えた。同文庫は周知のように、「マスコミの帝王」「国民的評論家」などと呼ばれた大宅壮一（一九〇〇—一九七〇）の蔵書をもとに、その遺言にもとづき設立されたものである。ちなみに、夫人で同文庫初代理事長の昌が『大宅文庫ニュース』第一号に寄稿した文章によると、「一個人の資料室がそのまま寄付されて財団法人となったケースが未だかつてない」という¹。

この大宅壮一について私は、本誌創刊準備号（二〇〇八年三月）に大衆娯楽雑誌『平凡』と評論家大宅壮一——ふたつの研究から見えてくるもの——と題した一文を寄せ

た。このなかで、一九五〇年代を代表する大衆娯楽雑誌『平凡』について同年五月に上梓した拙著（『平凡』の時代——一九五〇年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』、昭和堂）の内容とともに、『文学』三・四月号に発表した拙論（「大宅壮一研究序説——戦間期と昭和三〇年代との連続性／非連続性——」）の概要を紹介した。そして『平凡』研究と大宅研究から何が見えてくるのかについて私見を述べた。あれから三年半が経過したいま、私自身の大宅研究の状況についてここですこし中間報告を試みたいと思う。

「占領期の「大宅壮一」について

本年三月私は、「占領期の「大宅壮一」——「大宅壮一」と「猿取哲」——と題した論考を、早稲田大学二〇世紀メ

ディア研究所発行の機関誌『Intelligence』第十一号に発表した。これは前年四月に同研究所で開かれたシンポジウムでの報告内容をもとにしている。

拙論は文字通り、これまで研究が空白であった、占領期——とくに一九四〇年代後半——の在宅の活動の検証をおこなったものである。この論文のとくに前半の内容が、『週刊読書人』八月二十六日号のコラム「風来」で紹介された。そこで本稿でもこの部分について書いてみたい。

この時期の在宅については、本人が、戦後のマニフェスト論文として名高い「無思想人」宣言（一九五五年）のなかで、敗戦後も戦時中からの農耕生活を続けていたが、毎日新聞の友人に勧められ「猿取哲」のペンネームで再びペンを取り始めた。そして本名での活動を再開したと述べている。

『大宅壮一全集』の別巻『大宅壮一読本』所収の「大宅壮一年譜」も、在宅のこの記述をほぼ裏づけるものとなっている。

それに対し私は、拙論の第二節において年譜の検証等をおこなった。その結果、在宅が本名で雑誌に登場しているものとして、一九四五年一件、一九四六年五件、一九四七年十一件、一九四八年十三件、一九四九年十六件、一九五

〇年二十六件の記事をカウントした²。いっぽう、「猿取哲」名義のものは、一九四八年一件、一九四九年十一件、一九五〇年七件であった。

また、在宅は『毎日新聞』一九四八年五月二十四日付から一九四九年十一月二十七日付まで「猿取哲」名義で「同時代人」を連載するかたわら、一九四九年の一年間『毎日グラフ』に本名で「閑人帖 写真時評」を連載している。

このように同じ毎日新聞社の別の媒体に本名とペンネームを使い分けて登場していることから、在宅は敗戦後から本名を使って活動をし、一九四八年から一九五〇年まで本名とペンネームを使い分けていたことが明らかである。すなわち、従来の通説を図1とすれば、上記の事実を踏まえた図2へと図式を修正する必要があるのである。

なお、拙論発表後の追加調査から、次の記事を加える必要があることがわかった（表1、2。二〇一一年八月三十日現在）。

この表を踏まえると在宅の登場記事の数は本名でのものが一九五〇年三十件、ペンネームでのものが一九四九年十二件となる。

こうした在宅に対して同時代どのような認識がなされていたのであろうか。

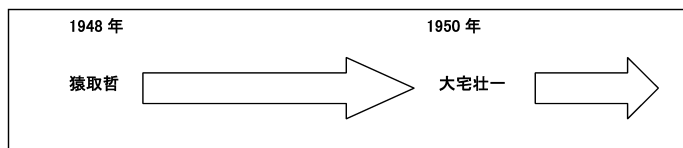


図1 従来の図式：「猿取哲」から「大宅壮一」への転換

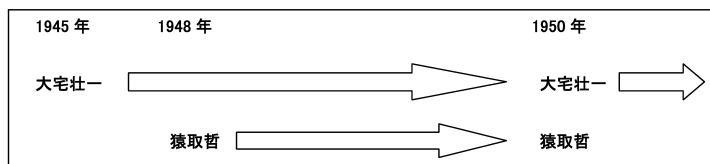


図2 新たな図式：「大宅壮一」を一貫して用い、ある時期「猿取哲」も並行して使用

【表1 占領期「大宅壮一」名での雑誌記事(追補)】

タイトル	掲載誌	掲載号	発行の日付
事件をめぐる新聞合戦	『日本週報』	141号	1950年2月15日
叛逆児としての近衛文麿	『前進』	第33号	1950年4月1日
叛逆児としての近衛文麿	『前進』	第34号	1950年5月1日
人物評論の視角	『前進』	第38号	1950年8月1日

【表2 占領期「猿取哲」名での雑誌記事(追補)】

タイトル	掲載誌	掲載号	発行の日付
吉田総裁と吉村隊長	『自由公論』	1949年6月号	1949年6月1日

拙論ではふたつの事例を挙げたが、ここではまずそのひとつである、『火 家庭雑誌』（第一巻第二号、一九四七年九月）³ という雑誌に掲載された見開き二頁の寄せ書きを紹介したい。

この「消防の方々ありがとう」と題された寄せ書きでは、小説家江戸川乱歩、農林大臣平野力三、小説家中野実、小説家高見順、横綱前田山、将棋八段花田長太郎、小説家久米正雄、歌手並木路子、映画俳優佐野周二、詩人サトウ・ハチロー、俳優辰巳柳太郎ら二十一名が署名し、その肩書きも記載されている。そのなかに「評論家大宅壮一」も見られ、かつ署名も中央である。

このことから大宅は、農業のみならずさわる過去の評論家として見なされてはいなかったと考えられる。すくなくとも、文筆業をも営む人物

として認識されていたといえよう。

このほかにも大宅が「猿取哲」名を使い出して以降の事例をふたつ紹介したい。大宅は一九四九年十二月から『小説読物街』（高島屋出版部）に『日本の遺書』と題した小説を連載するが、その連載によせられた五名の推薦文のなかで吉川英治が大宅のことを「この寡作な作家」と書いている⁴。このことから、文筆業を営む人物と認識されていたことがうかがわれる。さらに同年十一月に発行された『トッパン最新文化便覧』は冒頭に「この書は、その名の如く、文化人一般ならびに文化関係の団体、機関、施設をあまねく収録し、在日外国機関にもおよび、文化人座右の書たることを期した」とある。このなかに大宅は、「評論」という領域とともに記載されている⁵。

ここまで占領期の大宅について拙論をもとに紹介した。これら占領期の大宅の著作物の内容に加えた考察については拙論の後半をご覧ください。また、当時の大宅自身のことばと関係者の証言をすこし見てみたい。

占領期の「大宅壮一」をめぐる「点と線」

大宅は太平洋戦争勃発とともにジャワ派遣軍宣伝班に徴用され、一九四三年十月末に帰国している。翌日より世田

谷区野沢の自宅の庭で開墾をはじめ、翌年八幡山に移り住んでいる。大宅はこう振り返っている。

（引用者注：昭和）十八年の暮、南洋ジャワから帰国して「戦争はこれからも永く続くだろう」こんな予感から、モノを書くことをやめ、自給自足の生活を送れるようにと、百姓をはじめめる決心をした。（略）

四段歩の田畑を買い、米、ムギを作る一方、蜜バチ、ブタなどを飼った。一応自給自足の目安がついた十九年暮、東京は、空襲でメチャメチャにやられ、戦局が別の段階に突入したことがわかった。（略）

終戦になっても、モノを書くということは考えられなかった。だが、生活には困らなかった。それというのも戦前のカメラ道楽のおかげだ。何しろ、ライカのコンプリート・セットが四組もあったので、これを一つ売れば四十坪の土地つきの家が一軒買えたぐらいだから、売り食いと、自給自足で、ジタバタする必要もなかった。

ご時世に迎合するようなものをナンデモカデモ書かなくてもよかったというわけだ。カメラ道楽に救われた終戦」というヤツだ。

左翼の天下になると、左翼から盛んに書け書けと勧められたが、戦地での経験から、変革の直後に動きまわる人間は、世の中が安定すると一掃されるということがわかっていたから、なにも書かなかった⁶。

このような政治的・思想的運動から距離をおきたいという心境は、同時代の一九四七年に本名で発表した「亡命知識人論」においてもつづられている。亡命から帰国した野坂参三・鹿地亘・大山郁夫について「私には、三氏とも亡命以前、幾度か会ったことのある人たちである。その頃の運動や仕事を離れて、人間的に親しみ深い思い出も少なくない。野坂、大山の両氏は、私には大先輩であるが、鹿地君とはナツプ時代、毎日のように会合し、議論した間柄である」としている。「ところが、これらの三氏が日本に帰られてから、私はまだ一度も会ったことがない。その姿をちらと見たこともない。終戦後しばらくは政治的に沈黙を守りたいという私の気持が、かれらに会えるようなところへ足を向けることを妨げていたからである」という⁷。

夫人の昌も、こう書き残している。

戦後、世はまさに、てんやわんや、社会党や共産党

から、いろいろと声がかかったらしい。詳しいことは私に知らせなかったが、

「今、こんな世に、物をいい、どこかに所属すると、やがてどんなことになって、後悔するかかわらない。当分世がおちつくまで百姓して静観する」といった⁸。

ここからも、敗戦後の民主化運動の高揚期に大宅はそれを静観していたことがうかがえる。

ところで大宅をジャワ派遣軍のメンバーとして推薦したのは、陸軍画報社長・中山正男である。敗戦直後（八月中和思われる）中山は会社の「だれもない部屋で書類の整理をしていた」ところ大宅がやってきたという。中山はこう書いている。

「おい、地下にもぐれ。そして一日でも生きのびてくれ。家族のことはおれたちで引受けるから」

私と顔を合わせるなりこう言った。大宅はその時、軍国主義者は連合軍によって処断されると考えていたのだ⁹。

中山の証言からわかるのは、国家の動きをも静観する、戦中から敗戦にかけての在宅独特のすごしかたである。在宅の弟子のひとり・大隈秀夫によると、在宅が「敗戦の年を挟んで五、六年間の明け暮れをマージャンにたとえながらちよつぱり口を開いた」ことがあるという。

「帰国してからの本格的な農耕生活、戦後三、四年の沈黙をおれは『文筆的断食時代』と名付けたんだ。君はマージャンに詳しいんで話をしよう。ジャワから帰国したときの心境を言うと、マージャンのゲーム中にオリたようなもんだよ。戦後しばらく黙っていたのは勝負に出るときではないと読んだからね。テンパイしたからといって攻めていたら大きな手に振り込んでいただろうな。オリてたからこそ戦後、追放の憂きめにも遭わなかった」¹⁰。

これらから、在宅が左翼運動だけでなく、国家をも見つめ占領期をおくっていたことがわかる。そのなかで著されたのが、先に点数をカウントしたテキスト群なのである。

ここまで、在宅の遺したテキスト群や関係者の記録のなかのに書かれたひとつひとつのことからという、いわば

「点」をむすんだいくつかの「線」をひいてみた。これらの「線」をとおして私たちに見えてくるのは、在宅独特の占領期のふるまいかたである。こんどはそれを、同時代といういわば「面」の上にのせることでそのより強い意味づけができよう。私に次に求められているのはその作業である。

【注】

1 大宅昌「ご挨拶」『大宅文庫ニュース』第一号、財団法人大宅文庫、一九七二年九月一日、一頁。

2 記事の探索は、「占領期新聞・雑誌情報データベース」『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』ならびに主要雑誌の誌面調査によった。一九五〇年のものはおもに前掲目録によっており、実際の数はこれをうわまわる。なお探索の過程では桑原涼氏（岩波書店）からご教示を得た。記して感謝したい。

3 この号の奥付によると、発行所は日本消防文化協会となっており、発行人は小林隆となっている。編集後記には、「本誌主幹である小林協会理事はこのたび僚社Gメン社をおこして防犯新雑誌『Gメン』を主宰し、終戦後の混乱せる社会の公安、向上に盡瘁することになった。『火』同様の御後援をこいねがう次第である」とある（五十頁）。一般に『Gメン』はカストリ雑誌とされていることもあるが（たとえば、ジョン・ダワー（三浦陽一・高杉忠明訳）『増補版 敗北を抱きしめて 上』岩波書店、二〇〇四年、百

七十三頁）、拙論において紹介しているように大宅は同誌に創刊号から寄稿している。それは小林との人間関係によるものと推測される。

4 吉川英治「日本の遺書」に寄す『大宅壮一全集 第二十八巻』蒼洋社、一九八二年、六頁。

5 トッパン調査部編『トッパン最新文化便覧』トッパン、一九四九年、二十七頁。

6 大宅壮一「その時―八月十五日―私はこうしていた 蜜バチとブタのなかで」『週刊サンケイ』一九五七年八月二十五日号、二十頁。

7 大宅壮一「亡命知識人論」『改造』一九四七年十二月号、十九、二十頁。

8 大宅昌『大きな駄々っ子―大宅壮一と共に歩んだ四十年』文藝春秋、一九七一年、百二十二頁。

9 中山正男『二軍国主義者の直言』鱒書房、一九五六年、百二十九、百三十頁。中山は同じことを、十年後大宅について書いた『毒舌一代』（太平出版社、一九六六年）のなかでも述べている（二十一頁）。再び記せたのは、『二軍国主義者の直言』で書いたエピソードに対し大宅から抗議がなかったからだと考えられる。したがって、このエピソードの信憑性は高いといえよう。

10 大隈秀夫『裸の大宅壮一―マスコミ帝王』三省堂、一九九六年、三百十五頁。

（宮崎公立大学）